

ばんざい小屋

「ばんざい小屋」という命名は誰がしたのか、分らないが、下の絵のように「ばんざい」を叫んで、戦地へ出征する兵隊の誰彼となく見送りする小屋を、北陸線の沿線に作った。

金澤からの「上り列車」が多かったので、福島の在所沿いに、稲を干す稲架木を柱にして、屋根は藁葺きのものが幾つも並んだ。

「どこそこのお父さんが」とか「どこそここの兄さんが」とかの情報がなんとなく自然に、福嶋中に伝わり、手のすいたものが一日中確認するまで「ばんざい小屋」で待ち、最後になるかもしれない別れを「ばんざい」で送るのであった。

下の絵のように、夜間に列車が通る時には、かねてから積んで置いた、藁を盛大に燃やし、我が親や我が兄を「絶対に確認」するまで燃やすのであった。

また、情報が伝わらず、見送りを受ける事無く通過した、兵隊の噂を聞いて、他人事なく涙を流した。朝早く鉄道線路を巡回して、「我が子の名刺」を見つけて、通過を確認した話も伝わり「いとしや」と涙を流したものである。

また、矢のように通過する、孫を確認できず、悲しい思いを生涯持ち続けた、老人も多かつたであろう。

私は、「吉原が火をつけたぞ」と喚いて、火をつけた日を忘れない。

